

農業総合研究センター130周年に寄せて



農業総合研究センターは、今年で創設 130 周年を迎えます。1895 年（明治 28 年）に栃木県立農事試験場として発足して以来、時代のニーズに即した研究開発を進め、長年にわたり本県農業の発展を支えてきました。

昨年には、農業試験場と農業環境指導センターが再編統合され、農業総合研究センターとなりました。これにより、新品種・新技術の開発や原種生産に加え、肥料や農薬の検査・指導まで幅広い役割を担うことになりました。

私が入庁間もない 1990 年代には、旧農業試験場が 100 周年を迎えました。当時は、平成 5 年の記録的な冷夏による「平成の大冷害」の経験を踏まえ、水稻の安定生産に向けた耐冷性の強い品種開発や、生育診断技術の確立・普及が急務となっていました。また、いちごは「女峰」から、後にいちご王国を支える存在となる「とちおとめ」への品種の転換が進むなど、試験研究が現場の課題解決の原動力となっているのを目の当たりにしてきました。

それから 30 年が経過した今では、水稻をはじめ様々な品目で気候変動に対応した耐暑性品種や栽培技術の開発が喫緊の課題となっており、いちごは「とちおとめ」から「とちあいか」への転換が急速に進んでいます。

農業の担い手減少による労働力不足や地球温暖化の進行に加え、新たな病害虫の発生や消費者嗜好の多様化など、農業を取り巻く情勢がめまぐるしく変化する中、研究開発分野においては、未来を見据えた先進的な取組が一層求められ、県の試験研究機関としての役割も転換期を迎えていると感じています。

農業総合研究センター（旧農業試験場）は、これまでも農業者の皆様と共に知恵を絞りながら多くの課題解決を図ってきました。変化の激しい時代にあっても、研究機関としての真価が問われます。蓄積してきた技術力に自信と誇りを持ち、将来の本県農業の発展に大いなる夢を抱きながら、今後とも「時間は有限 可能性は無限」を合い言葉に研究開発を進めてまいります。

今年度は 130 周年を記念し、年間を通じてこれまでの研究成果を広く PR していきます。8 月には特別企画の公開デーも実施しますので、より多くの県民の皆様にお越しいただきたいと思っています。心よりお待ちしております。



農業総合研究センター
所長 紫田 和幸

